

言 寸 議 義

土木學會誌 第十三卷第六號 昭和二年十二月

再び海中工事に於ける鐵筋混凝土に就て

(第十三卷第一號 及第五號所載)

著 者 會 員 工 學 博 士 廣 井 勇

海中工事に於ける鐵筋混凝土に關する著者の所述に就き會員松本虎太君の討議に接したる幸とする處なり。蓋し同君は多年此の種工事の施設に當られ學識經驗共に深く君が所論は以て最も尊重すべきものなるを以てなり。

松本君の所説によれば臺灣地方に於ては鐵筋の腐蝕すること滿潮面上に於て最も多しとす。是れ可有事ならん蓋し熱帶地方に在りては高溫度による比較的急速なる乾燥に尋き碎波泡沫の吸收並に海水末を以て飽和せる熱氣の作用は北地に於ける著者の觀察及び想像以外なるべし。

著者が實驗に供したる固塊は實際工事に於けるものと異なるは明白なる事實にして其の結果を以て直に後者の命數を推定せんとしたるものに非ず、單に發錆に基く作用を實現せしめんとしたるに外ならず、鐵筋工事破壊の始を 30~50 年と豫想したるは或は聊か短期に失せんか固より精確なる根據あるものに非ず要は粗工に對する警告たるに過ぎず。

近時海外に在て木杭に煙脂を用ふる如く鐵筋杭に土瀝青を滲裝すること行はれ其の結果良好なりと云ふ是れ一種の延命法ならん。(終)